



岐阜市は斎藤道三や織田信長など名高い戦国武将が活躍した舞台です。道三・信長は何故岐阜市を選んだのでしょうか？英雄たちが欲しかった岐阜！その歴史を作ってきた武将や武士団、彼らの知られざる活躍を一緒にひも解いていきましょう。身近なところにある歴史が、新たな気付きにつながるかもしれません。

しつとる？ 美濃源氏と岐阜市

美濃源氏は平安時代11世紀頃美濃に進出した清和源氏系統の武士団のことで、「美濃源氏は土岐氏」とみられがちですが、実際は複数の系統に分かれています。その中から「国房流」と「重宗流」についてご紹介します。

1 国房流源氏から土岐氏へ



■ 図1 国房流源氏系図

国房流源氏の系統は、11世紀前半頃美濃国に進出したと推定されています。11世紀後半、鶉に館を構えた源国房は東に隣接する東大寺領西郷の土地の一部を自分の領地に組み込もうとして息子光国の代まで続く争いを起します。12世紀前半頃、国房の孫たちは京都で鳥羽上皇に近い武士として活躍します。しかし、1156年に鳥羽上皇が亡くなると間もなく光保は失脚します。この事件と関連するかどうかわかりませんが、12世紀中頃までに国房流源氏は東美濃土岐郡に進出します。

反平氏軍として活躍しますが、寿永2年(1183年)11月、京都の法住寺殿を守って木曾義仲軍と戦い討死にしています。光長の息子光衡は土岐郡に住み土岐を名字として土岐氏の祖とされます。光衡死後、息子土岐光行は父同様に有力御家人として鎌倉將軍近くに仕えます。そして1221年、後鳥羽上皇を中心とする京方の軍と北条義時の率いる鎌倉幕府軍が戦った承久の乱にも幕府方として参戦、幕府方が勝利した結果、土岐氏は鎌倉時代を通じて存続し、室町幕府の成立とともに美濃国守護に就任します。大河ドラマ「麒麟がくる」で鷹の絵を描いていた土岐頼芸は最後の美濃国守護です。



■ 写真1 鶉田神社

から少し北に行つたところに中世五輪塔が集められた一画があり、中世鶉の中心地はこの付近と思われる。また、鶉田神社(写真1)が国房領鶉郷東端と西郷西端の境界に鎮座していることは、記録は残されていませんが、何か意味があるのかもしれない。

2 重宗流源氏と岐阜市

重宗流源氏の系統は、木田や葦敷、開田、彦坂などの土地の名前にあります。鶉にあった源国房の館の場所はわかっていますが、鶉小学校か

皇側に味方したため、乱後没落して岐阜市では歴史の表舞台から姿を消します。鏡島弘法乙津寺には鎌倉時代とされる木造毘沙門天立像(国重文)が伝えられています。この仏像と愛知県豊田市足助の香積寺が所蔵する毘沙門天立像(平安時代末、愛知県重文)は姿形が極めて良く似ており、私は近い仏師の手によるものとみています。平安時代末、鎌倉時代初めは重宗流源氏が活躍した時代であり、足助は重宗流源氏と同族三河源氏足助氏の本拠地です。したがって、史料は残されていませんが、2つの仏像は重宗流源氏一族が関係して造られたのではないかと想像しています。



■ 図2 重宗流源氏系図

を名字とした一族の分布から、岐阜市北部の方県郡各地に拠点を構えたと推定されています。赤坂恒明氏の研究によると、厚見郡司をつとめた一族が代々源重宗やその孫の家臣になっています。また大河ドラマ「光る君へ」にも登場した藤原実資の日記『小右記』から、重宗の祖父忠重の館は美濃国内の木曾川沿いにあったことがわかります。これらのことから重宗の系統は方県郡だけでなく、厚見郡にも拠点があったと推察されます。

の居城革手城の跡地はこの遺跡内にあります。12世紀初め頃までに重宗流源氏は尾張国山田郡(愛知県名古屋市長久手市)から日進市・長久手市あたり(山田と名乗ります。山田氏は尾張源氏とも呼ばれています。さらに12世紀後半、尾張源氏の重長は三河国足助郷に進出し、三河源氏足助氏となります。三河源氏は紅葉の名所香嵐渓あたりに拠点を持っていました。こうして重宗流源氏の一族は、美濃・尾張・三河にまたがる広大な土地を支配していました。足助重長の娘が鎌倉幕府二代將軍頼家の正室に嫁ぎ、その息子が三代將軍実朝を暗殺した公暁です。大きな勢力を誇った重宗流源氏ですが、1222年の承久の乱において後鳥羽上

このように平安時代後期から鎌倉時代初めにかけての岐阜市は、土岐氏(正確にはその祖国房流源氏)とともに重宗流源氏の本拠地でもありました。室町・戦国時代に土岐氏や斎藤道三・織田信長が岐阜市に居城を構えた理由のひとつは、当地が美濃源氏の故地であることによるでしょう。



■ 写真2 新荒田川(右が下川手遺跡、左が西郷庄)

校及びその南部に広がる下川手遺跡かその付近にあったとみられています(写真2)。下川手遺跡は古代から中世にかけての大規模な集落跡です。禅宗寺院正法寺や守護土岐氏

*参考文献「美濃源氏の登場」わかりやすい岐阜史」岐阜県、平成14年/赤坂恒明「三河と名乗られた重宗流源氏」吉川文館、令和2年/坂井孝「考証鎌倉殿をめぐる人びと」NHK出版新書、令和4年

*今回は6月号です。お楽しみに